The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本の職場及び日常生活における外国人労働者の言語的・文化的・専門的適応のプロセス－北陸地方におけるインド人介護士を対象とする社会言語学的研究－ |
| Author(s) | Hennessy, Christopher Robert |
| Citation | 大阪大学, 2025, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/101576 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（HENNESSY Christopher Robert） | |
|---|---|
| 論文題名 | 日本の職場及び日常生活における外国人労働者の言語的・文化的・専門的適応のプロセス<br>―北陸地方におけるインド人介護士を対象とする社会言語学的研究― |

論文内容の要旨

本研究は、日本の地方におけるインド人介護士の言語的・文化的・専門的適応プロセスを解明し、方言を含む地域の言語環境が職場や地域社会への統合に与える影響を考察したものである。社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法を用いて分析を行い、多層的かつ相互依存的な適応の構造を明らかにするとともに、適応を促進する要因や実践的な示唆を提示した。

第1章では、日本の介護現場における外国人介護士の現状と課題について多角的に考察している。特に、技能実習制度や特定技能制度などの政策的背景、外国人介護士が直面する言語的・文化的な障壁、地域社会との統合の困難さに焦点を当てた。また、COVID-19パンデミックが外国人介護士の労働環境に与えた影響にも触れ、これらの課題がいかにして介護業界全体の課題を反映しているかを示した。

第2章では、本研究の基盤となる先行研究を概観し、外国人労働者の社会言語学的課題に関する現状を整理している。まず、方言意識に関する理論を中心に、日本語L1話者とL2話者が日本語の多様性や地域方言に対しどのような意識を持つかについて考察した。従来の研究はL1話者の視点を中心に進められてきたが、L2話者、特に地方で働く外国人労働者に焦点を当てた研究は乏しく、本研究が対象とするインド人介護士の方言意識や適応プロセスについては未解明の部分が多い。さらに、言語イデオロギー、言語資本、言語的インベストメントといった理論を取り上げ、言語が単なるコミュニケーション手段に留まらず、社会的・文化的資本として機能し得る点を論じた。これらの理論は、地方における外国人労働者がどのように言語を学び、使用し、言語を通じて職場や地域社会に適応していくのかを理解する上で重要であり、本研究の分析的枠組みとして採用している。また、日本語教育の観点から方言指導の必要性やその限界についても触れ、特に地方における方言が外国人労働者の社会的統合に与える影響を深く考察した。結論として、地方における外国人労働者が方言に対してどのような意識や態度を持ち、どのように使用し、適応していくかを探る必要性を強調した。特に、地方特有の言語環境が彼らの職業的・文化的適応に与える影響について、定性的データに基づく研究の重要性を示した。これを受けて、本研究では以下のリサーチクエスチョンを設定した：(1) インド人介護士は、言語学習や職業実践において、現地の日本語方言の使用に対しどのような意識、態度を持っているか、(2) 日本の地方で働くインド人介護士にとって、現地の日本語方言は日常の職業的・社会的相互作用においてどのような役割を果たしているか、(3)日本の地方で生活し働くインド人介護士は、言語的・文化的・専門的にどのように適応し、その適応プロセスにはどのような要因が影響を与えているか。

第３章では、地方で働く外国人介護士の適応プロセスを解明するために採用した、社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法について述べた。この方法は、経験的データに基づく理論構築を可能にし、参加者の主観的経験と社会的・文化的文脈を統合する柔軟な枠組みを提供する。本章では、まず質的研究方法の歴史的発展を概観し、グラウンデッド・セオリー法の古典的アプローチから現代的進化までの過程を詳述した。特に、Charmaz (2014) の社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法の特徴について触れ、このアプローチがいかにして研究者と参加者が共同で意味を構築するプロセスを形成するかを説明した。

第4章では、本研究の調査対象となるインド人介護士が住んでいる福井県X市の地域的背景及び調査環境について説明し、人口動態や言語環境を明らかにした。また、その中で地域方言の特徴や社会的評価についても触れ、インド人介護士が直面する言語的・文化的な環境を理解するための基盤を提供した。

第5章では、予備調査の概要とその結果を示し、本研究のリサーチクエスチョンを具体化するための基礎的知見を提供した。予備調査では、日常生活や職場での経験について、4人の外国人労働者を対象に半構造化インタビューを実施した。この調査はCharmazの社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法に基づいて行われた。その結果、これらの外国人労働者は、日常生活の文脈において日本語を「丁寧な日本語」「普通の日本語」「やさしい日本語」「方言」の4種類に区別していることが明らかになった。また、それぞれの種類に対する意識や使用方法を調査し、これらがどの

ように認識され、カテゴリー化されているかを明らかにした。さらに、予備調査を通じて得られた課題や制約を整理し、それに基づいて本調査の焦点を絞る必要性を示した。また、この章は本研究の本調査を支える重要な基盤を提供しており、外国人介護士が日常的に直面する言語的多様性やその対応方法を深く理解するための文脈を設定している。

第6章では、本調査の概要と分析方法について詳述している。本研究では、福井県X市で働くインド人介護士8名を対象に、半構造化インタビューを実施した。このインタビューは、予備調査の結果を踏まえて調整したインタビューガイドを用いて行い、各インフォーマントの職場や日常生活における言語的・文化的体験を深く掘り下げた。インタビュー時間は平均90分で、事前に実施したアンケート調査からも追加データを収集した。社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法による分析により、外国人介護士の適応プロセスを捉えるためのカテゴリーやテーマを抽出し、それらがどのように相互作用し合うかを明らかにした。特に、言語的・文化的適応に影響を与える要因として、地域方言や標準語の使用、職場環境、支援ネットワーク、個人の対処戦略が重要であることが示唆された。結論として、外国人介護士の適応プロセスを多角的に分析するための基盤が構築され、本調査が外国人労働者の社会言語学的課題に新たな知見を提供する可能性を示した。

第7章、第8章、第9章では、インフォーマントとのインタビューで得られた発話を社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法により分析し、構築した9のカテゴリーと代表的な発話例を示した。言語的・文化的・専門的適応に関する分析を行ううえで、第7章では以下の3つのカテゴリーに焦点を当てた。①言語学習・習得：インド人介護士は標準語や方言の学習を通じて職場や地域社会に適応しており、方言は親しみやすさを生む一方、習得の難しさが適応の障壁となることもあった。②文化的・社会的統合：方言の使用や理解は地域社会との関係構築に寄与し、適応を促進する重要な要素として機能していた。③文化的・言語的な課題：方言と標準語の切り替えや医療現場特有の専門用語の理解に苦労し、文化的な違いが適応プロセスに影響を与えることが明らかになった。

第8章では、支援と適応戦略を分析し、以下のカテゴリーを中心に議論した。④サポートネットワーク・人間関係：職場の同僚や地域社会の人々との支援関係が適応を助ける重要な要素であり、彼らの孤立感を軽減する役割を果たしていた。⑤対処メカニズム・レジリエンス：インド人介護士は困難な状況を乗り越えるために個別の戦略を採用し、心理的な回復力を高めていた。⑥適応戦略・成長：介護士が統合を改善するために取る意図的な行動をとることにより、適応を進める中で、個々の成長や新しいスキルの獲得が見られた。

第9章では、内面的変化と職場統合に焦点を当て、以下の3つのカテゴリーを扱った。⑦アイデンティティ・所属：適応を通じて地域社会や職場における自己認識が変化し、一員としてのアイデンティティを形成していた。⑧動機付け・期待：職場での成功や地域での受容を目指し、自身のキャリア目標や家族のための意識を持ちながら適応を進めていた。⑨ 職場でのダイナミクス・コミュニケーション：言語的適応が職場内での円滑なコミュニケーションを可能にし、チームワークや職場統合を強化する重要な要因となった。

第10章では、第7章から第9章までの分析結果を統合し、インド人介護士の適応プロセスを包括的に議論した。本章では、9つのカテゴリーを基に、言語的、文化的、専門的適応がどのように相互作用し合い、職場や地域社会での統合を可能にしているかを理論的に整理した。まず、リサーチクエスチョン1（方言意識）に基づき、インド人介護士が地域方言に対して持つ親近感や、方言がコミュニケーションを円滑にする役割について議論した。次に、リサーチクエスチョン2（方言の役割）に焦点を当て、地域方言が日常的・職業的相互作用において信頼関係を構築し、職場での統合を促進する要因として機能することを示した。最後に、これらの分析をもとに視覚的モデルを構築し、リサーチクエスチョン3（言語的・文化的・専門的適応）の問いに基づくプロセスを理論化した。このモデルは、外国人介護士の言語的・文化的・専門的適応が、支援ネットワークや個人のレジリエンス、地域社会との関係性によってどのように支えられているかを説明している。また、適応の成果として、職場統合や自己成長、地域社会への貢献が挙げられる。結論として、言語教育プログラムの改善や地域社会との連携強化が適応を促進する鍵であり、本研究が実践的示唆を提供するものであることを示した。

第11章では、本研究の全体を総括し、主要な成果、限界、今後の課題について議論した。本研究は、インド人介護士の言語的・文化的・専門的適応プロセスを明らかにし、地域方言が職場統合や地域社会との関係構築に果たす役割を理論的に整理した。限界として、対象者の規模や地域に限定がある点が挙げられるが、本研究は日本で就労する外国人労働者に広く適応可能な多次元的適応モデルを提供し、かつ社会言語学研究及び移民政策における適応支援策の改善に向けた実践的示唆を提供している。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　　名　（ HENNESSY Christopher Robert） | |
|---|---|
| 論文審査担当者 | （職）　　氏　　名<br><br>主 査　大阪大学　教授　　高　木　千　恵<br>副 査　大阪大学　教授　　渋　谷　勝　己<br>副 査　大阪大学　准教授　　眞　野　美　穂 |

**論文審査の結果の要旨**

以下、本文別紙

様式 7 別紙

# 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：日本の職場及び日常生活における外国人労働者の言語的・文化的・専門的適応のプロセス
―北陸地方におけるインド人介護士を対象とする社会言語学的研究―

学位申請者　HENNESSY Christopher Robert

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　高　木　千　恵
副査　大阪大学教授　渋　谷　勝　己
副査　大阪大学准教授　眞　野　美　穂

【論文内容の要旨】

本論文は、北陸地方の特別養護老人施設に勤務する 8 名のインド人女性介護士を対象に、日本語を第二言語として使用する彼女らが、職場や日常生活のなかで直面する言語的・文化的・専門的な課題にどのように向き合い、克服しようとしているかについて、社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法を用いて、半構造化インタビューによって得られたデータを詳細に検討し、言語的・文化的・専門的適応プロセスのモデル化を試みたものである。

本論文は序章と 11 の章で構成されている、第 1～6 章において、研究の背景、理論的枠組み、フィールド概要、準備調査ならびに本調査の概要を述べ、第 7～9 章でインド人女性介護士たちのインタビューデータから得られた 9 つの「カテゴリー」の詳細な分析を行う。第 10・11 章ではこれら 9 つのカテゴリーを統合して言語的・文化的・専門的適応のプロセスのモデル化を試み、その意義と課題を述べる。本文は A4 判 136 ページに及ぶ。

論文の構成は大きく 3 つに分けられ、序章（はじめに）から第 6 章が序論に相当する。まず序章において、本研究の目的と本論文の全体の構成について述べ、続く第 1 章で、研究の背景として、日本の介護現場で外国人介護士の果たす役割と、とくに地方において顕在化する、外国人介護士をめぐる問題群を整理している。続く第 2 章では、先行研究として、日本における外国人労働者の社会言語学的問題、言語イデオロギー、言語資本、言語インベストメント、異文化適応、日本語方言に対して非母語話者の抱く言語意識を取り上げ、これまでの研究の流れを概観したうえで本研究の目的と意義が述べられている。第 3 章では、理論的枠組みとして社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法について述べるとともに、インド人介護士たちが日本社会に適応するプロセスを理解するうえで重要な鍵概念となる言語イデオロギー・言語資本・言語インベストメントについて説明している。第 4 章でフィールド概要を述べたあと、第 5 章で準備調査の概要、第 6 章で本調査のデザインと分析方法が扱われている。本研究では、社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法を用いてインタビューデータのすべての発話に対してコーディングを施し、そこから、言語問題・文化的な問題・社会的な問題にかかわるコードを「カテゴリー」としてまとめるという分析手法をとる。初期コードの統合によって、以下の 9 つのカテゴリーが抽出された。すなわち、①言語学習・習得、②文化的・社会的統合、③文化的・言語的な課題、④サポートネットワーク・人間関係、⑤対処メカニズム・レジリエンス、⑥適応戦略・成長、⑦アイデンティティ・所属、⑧動機付け・期待、⑨職場で

のダイナミクス・コミュニケーションである。本論の第 7〜9 章では、これらのカテゴリーごとに、インド人女性介護士たちがどのような問題に直面し、それらに対してどのように対処しようとしているか、問題解決の助けとなるものは何かといったことについて、実際のインタビューデータを示しつつ詳細に検討している。第 10 章では、上述の 9 つのカテゴリーを融合させ、外国人介護士が日本の地方の職場環境に適応し、成功するための理論的なモデルの構築を試みる。そのモデルは、日本で働くことに対する動機付けや期待をもって来日した介護士たちが、言語学習・習得や周囲のサポートを受け、適応戦略を獲得し、職場でのコミュニケーションを通して自己のアイデンティティや帰属意識を確立させるなかで、問題を乗り越え、地域社会の一員として適応してゆくというものである。ここでは、日本で働く外国人介護士が直面する言語的・文化的な課題を解決するための一連のプロセスが循環モデルとして提出されており、さまざまな課題に直面し、解決の方法を模索し、乗り越えるというプロセスを繰り返すことで社会への適応が完成すると主張する。終章の第 11 章では、日本の地方で働く外国人の言語問題・社会問題に対する本研究の貢献と、残された課題について述べられている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の特色は、インド人女性介護士たちが北陸地方で働き、生活するなかでどのような経験をし、職場や地域社会に適応すべくどのような方略を取っているかが、語りによって引き出されている点にある。日本語を第二言語とする外国人労働者にとって、地域方言が生活語として使用されている方言主流社会・方言中心社会で生活することは、大きな困難をもたらす。本論文のインタビューデータの分析からは、この困難が単に方言理解や運用能力の不十分さだけからくるものではなく、方言使用と共同体のメンバーシップ獲得の問題や、地域の人々にとっての方言を使うことの社会的意味、外国人労働者が日本語以外の言語を使用することに対する日本語母語話者たちの評価や態度ともかかわる問題であることが明らかにされている。加えて、本論文では、そうした問題群を指摘するに留まらず、調査協力者たちがそれらに対してどのように対応（しようと）しているかにも注目している。語りから見出された、⑤対処メカニズム・レジリエンスや⑥適応戦略・成長といったカテゴリーの存在からは、彼女たちが、周囲からの助け（④サポートネットワーク・人間関係）を求めるだけの受け身の存在ではなく、問題解決のために主体的に動き、共同体の一員となるべく努力を重ねていることが窺える。また本論文では、調査協力者たちの社会への適応にとって何が有効であるかを探り、それらを 1 つのモデルへと統合することを試みている。語りから得られたカテゴリーを立体的に組み直すことで一般化を目指し、地方に暮らす外国人労働者が言語的・文化的・専門的に適応するための施策の提言など、本研究の成果の社会的な還元が意識されている。

以上の点は高く評価されるところであるが、一方で、本論文にはいくつかの問題点も指摘される。1 つは分析にかかわるもので、初期コードからカテゴリーを抽出するプロセスで何が「抽出されなかったか」という問題である。本研究では、研究者の先入観や主観を極力排除することを目的に社会構成主義的グラウンデッド・セオリー法を採用しているが、データ分析の手続きにおいて、言語問題・社会問題にかかわらないとみなされたコード群にどのようなものがあったのか、明示する必要があったと思われる。もう 1 つはモデル化にかかわるもので、本論文では外国人介護士の適応プロセスを「循環プロセス」としているが、実際には、単に循環するのではなく、社会的適応（の完了）に向かってらせん状に進むことが考えられる。実際に提示されたモデル図もそのように描かれており、適応プロセスの解釈と説明のための用語を検討し直す必要があるだろう。また、本論文で示されたモデルが「地方に暮らす外国人労働者」にまで拡大して適用できるとすることについては、今後の検証が必要である。このように問題は残されているものの、さらに調査研究を重ねることが期待される発展的課題ともいうべきものであり、本論文の価値を損ねるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。